

蹴菊しゅうきくの御遊ぎょいうは、用明ようめい天皇の御宇、唐土たうどより渡りて、上宮じやうぐう太子の御徒然おんつれがを慰奉らんと、雲卿うんけいこれを翫もてあそぶ。「埃囊抄」厥その后文武天皇大宝年中、内裏だいりに專行もばららる。鞠まりの神は近江志賀郡松本精大明神、神体は猿田彦命の幸魂さきみたまを祭る。初は洛陽桂宮らくやうかつらに在いましなり。又後鳥羽上皇も此道を賞じ給ふ。今は七夕の日、恒例として、飛鳥井難波あすかゐるなんばの両家に於て蹴菊あり。此日は梶かじの御鞠おんまりとて、雲上家うんしやふかさんにふ参入、又地下ちげの門人も参る。書院の椽側には種々の色ある鞠を飾らせ、鞠庭かじりには四本の松蒼々として、許色ゆるしいろの水干紫裾濃すゐかんむらさきすそこの袴を着し、両々三々の高低に身をそばめ、沓の音斜陽の影に響て都の壯觀なり。

夫 木 鞠の庭に桜柳を移し植て春は錦に立やまじらむ

為 家